

MUSEUM NEWS

秋田県立博物館ニュース

新着収蔵資料紹介

秋田臨海鉄道資料（惜別ヘッドマーク）

秋田臨海鉄道株式会社は昭和 45 年（1970）に設立され、およそ 50 年間にわたって秋田市臨海地区の貨物輸送に携わってきましたが、今年の 3 月をもって全ての貨物鉄道事業を終了することとなりました。それにともない、車番プレートや時刻表など約 50 点に及ぶ関係資料の寄贈を受けました。

写真は今年 3 月の最終運行の際に取り付けられていたヘッドマークであり、直径 90 cm ほどの大きさになります。

CONTENTS

- 01 表紙・目次
- 02 展示報告 美の國の名残
- 03 展示報告 秋田野球ものがたり
- 04 展示報告 真澄コーナー展
- 05 わくわくたんけん室レポート
資料紹介（地質部門）
- 06 学芸ノート（考古部門）
- 07 学芸ノート（工芸部門）
- 08 博物館の風景

惜 別

2021. 3



JR貨物グループ 秋田臨海鉄道(株)

鉄道友の会
秋田支部

展示報告

美の國の名残

—— 博物館の審美眼

令和3年4月29日(木・祝)～6月27日(日)

昭和50年の開館以来、秋田県立博物館が収集してきた資料には多くの美術品が含まれていました。その大半は平成6年にオープンした秋田県立近代美術館へ移管され、秋田の美術を網羅するコレクションとなっています。美術部門が収集してきた古美術品は民俗、歴史など美術以外の部門に於いて、時代を語る貴重な資料として、その一部が博物館で収蔵され続けました。同じ理由で他部門に於いても、古美術品などの収集が続けられた経緯があります。

しかしながら、博物館の組織において「美術」が部門から姿を消したこともあり、美術資料が顧みられる機会は少なく、収蔵庫の奥深く眠ったままでした。他部門が収集した美術品も参考資料として展示説明されても、美術品としての価値や作者についての言及は多くはなかったのです。

今回の企画展はおおよそ半世紀をかけて秋田県立博物館が収集してきた様々な収蔵品に目を向け、「美」という観点で迫ろうとしたものです。歴代学芸員の幅広い見識と感性豊かな審美眼に敬意を表し、「美の国秋田」の遺産としてご紹介しました。

展示室は三つのテーマ「鄙のあたり」「書画の時代」「ちいさきもの」で構成し、だいたい民具、書画、工芸に分類して展示しました。室内のキャプションを極力減らしてテーマ解説と資料名ラベルだけにしたのは、解説に縛られず、学芸員が初めて資料と対峙した時のように、資料を眺て美を感じて追体験をしてもらいたいと考えたからです。もちろん全資料についての解説はパンフレットとして用意し、特記事項は番外の解説シートを作成配布しました。

収蔵庫から出した資料たちは展示室で想定外の新たな表情を見せてくれました。本来の用途から解放されたマネキンの腕や木型の顎(あぎ)は内在する造形美を現したのです。左右から当てるしかなかったスポットライトによって、地蔵菩薩の影が伸びました。それは天界に上るために羽が生えたように見え、神々しさが倍増しました。段違いに並べた襖は展示室の中に日本家屋のスケール感と家屋に入りこんでいくような空間を創りだしました。それぞれが想像以上の美しさと存在感を放ち、サプライズな空間を演出してくれたと思います。

今回の展覧会は数十年前から続けられてきた先輩学芸員の仕事の上に偶然作ることができたものです。資料との邂逅こそが学芸員にとって大切なことだと実感いたしました。博物館の収蔵庫にはまだまだ秋田の宝が眠っていて、新たな資料が日々収蔵されています。その中から学芸員は新しい秋田の魅力を見つけ、お伝えしたいと奮闘しております。ご期待ください。

(工芸部門：山本 丈志)



マネキンの腕と奉納足型



地蔵菩薩



小室怡々齋「松に旭図」



顎(あぎ)

令和3年7月17日(土)～8月22日(日)

企画展 秋田野球ものがたり

秋田県の野球の歴史と魅力を紹介する展示を行いました。タイトルの「秋田野球ものがたり」の「ものがたり」をあえてひらがなにしたのは、各資料の前に立ってその資料から係わった人々の思いを感じていただけるようにとの願いを込めたからです。

会場では時間をかけてじっくり観覧する方がよく見られ、野球への興味・関心の高さを感じました。また、親子で来館され子どもが多く、夏休みの宿題で野球を題材とした自由研究をまとめるために参考にしたいという方々もいらっしゃいました。

このたびの展示に際して、協賛をいただいた朝日新聞秋田総局、また快く資料をご提供いただいた方々に感謝申し上げます。

展示構成

第1章 秋田の野球あれこれ

第2章 白球を追いかけて

第3章 頂点めざして

第4章 生活の中の野球

第5章 野球とともに



甲子園球場の土の生みの親、石川真良の関係資料



全国大会に出場したことのある県内各高校のユニフォーム



第100回全国高等学校野球選手権大会準優勝盾



第77回都市対抗野球大会の黒獅子旗

(民俗部門：深浦 真人)

第1期 令和3年5月25日(火)～7月4日(日)

第2期 令和3年9月14日(火)～10月10日(日)

菅江真澄資料センター「収蔵資料の紹介」

深澤多市と絵葉書

菅江真澄資料センターでは企画コーナー展を年3回開催していますが、その合間には「収蔵資料の紹介」と題した展示をおこなっています。今年度はこれまで「深澤多市と絵葉書」をテーマにした展示を2期に亘って開催しました。深澤多市(明治7年～昭和9年)は『秋田叢書』(本巻12巻、別集6巻)を出版した人物で、これは昭和初期における「菅江真澄全集」とも呼べるものとなりました。

深澤多市は専用の収納箱を用意するなどして絵葉書を収集していました。多市の時代、現代とは違い個人で写真を撮ることは稀でした。そのため、記念写真代わりに絵葉書が購入されたようです。当時の絵葉書は名所・旧跡ばかりではなく、現代から見ると「あまり絵にならない」風景や事物さえも題材にされています。多市は自らの仕事(横手町助役)や郷土研究のために、絵葉書を利用しようとしたことがうかがわれます。そのこともあり、知人から絵葉書が贈られることもありました。当館所蔵の深澤多市旧蔵資料には、絵葉書が133組、個別の未使用絵葉書が45枚、使用済み絵葉書が332枚あります(整理中のため数は暫定)。

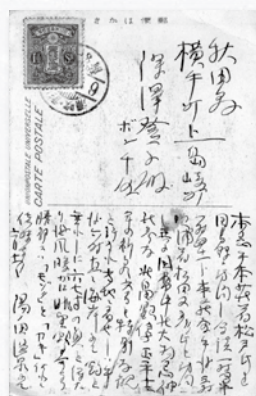
絵葉書の整理を進めてみると、多市逝去後、夫人によって加えられたと判断できるものが数種ありました。未使用の絵葉書の場合、発行年を判断するには困難を生じます。一方、使用済み葉書になると、確実に使用された年月日がわかりますし、差出人と絵柄との関係性を考えることもできます。そのことから、第2期では、使用済み絵葉書を中心に展示を組んでみました。

ここでは2枚の使用済み絵葉書を紹介します。

昭和6年6月11日付深澤多市書簡 夫人と飼い猫「ボンチ」宛て

○山形県吹浦村(当時)湯ノ田温泉からの通信で、同日に横手を発った後、本荘を経て、吹浦村の大物忌神社で特別参拝(資料調査)し、湯ノ田温泉に着いてから釣りをしたことなどが書かれている。

○絵柄は現在の城輪柵址(山形県酒田市)である。この年に始まった発掘調査により、角材が並ぶ遺構が検出された。発掘された当時、城輪柵址は出羽柵址(出羽国の国府址)として絵葉書(出羽柵調査会発行)になっている。



昭和5年1月11日付、深澤多市宛て根垣永吉書簡

○深澤多市は大正8年4月からの約2年間、京都府熊野郡(現在は京丹後市の一部)の郡長を務めた。多市と当地に住む知人との交流は多市の帰郷後も続き、近況などが知らされた。差出人の根垣永吉は多市の下にいた郡役所書記。熊野郡役所は久美浜にあった。

○昭和4年12月15日、久美浜―豊岡の鉄道(宮津線の一部)が開通して久美浜駅が神谷神社の東側にできたことや、周辺の建物が一新して上水道もできたことなどが絵柄面にまで書かれている。絵柄は、久美浜神谷神社。

(真澄部門: 松山 修)

コロナ禍における“わくわくたんけん室”の取り組み

昨年は全国的な新型コロナウイルス感染の拡大によって緊急事態宣言が出され、当館も休館を余儀なくされました。その後、県下では宣言も解除となり、わくわくたんけん室は曜日や時間を限定し再開することができました。令和3年もわくわくたんけん室は県の感染警戒レベルに合わせ開室、閉室を繰り返しながら運営しています。現在も十分な体験活動を提供できない状況が続いています。

開室するにあたり室内の密集を防ぐため、入場定員の上限を25名とし毎週土曜日に実施することになりました。感染対策としては入退室の導線も別々に確保し、利用者の受付も設置しました。その他入場時のマスク着用や手指消毒、連絡先の記入など利用者の皆さまにもご協力をいただいております。また、室内には新たに大型空気清浄機やサーキュレーターも配置し安心してご利用いただける環境を整えています。残念ながら触れて楽しむ宝箱や図鑑などの書籍類については、アルコール等による消毒が難しいことから現在も使用は中止しています。また、子どもから人気のレプリカづくりやさき織り体験などの体験プログラムも感染予防や身体的距離の確保が難しいことからお休みをしています。



わくわくたんけん室

新型コロナウイルス感染症の終息後は、段階的に実施日や時間を戻し、以前のように多くの体験プログラムを楽しめる展示室に戻れることを願っています。来館者の皆さまからは「石膏で作るレプリカづくりはいつ頃できるのですか？」との問い合わせも多く寄せられています。今後も当面の間、ご迷惑とご不便をお掛けすることになりますが、ご理解とご協力をお願いします。

(学習振興班：池端 広樹)

資料紹介

菅江真澄も欲しかった「木の葉石」



花紋石

菅江真澄『雪の秋田根』
(館蔵写本)より

江戸時代の紀行家菅江真澄は、享和2年(1802)から翌年にかけて、現在の北秋田市森吉にある白糸の滝を訪ねています。その目的の一つが、硯の原料としてたいへん貴重な、「花紋石」とよばれる石の採集でした。花紋石は木の葉石とも呼ばれ、植物の化石を含んだ硬い黒色泥岩です。真澄は2回にわたりこの石の採集を試みましたが、雪や雨のせいで願いを果たせなかったということです。

当館では昨年度、白糸の滝周辺で状態の良い植物化石を含む木の葉石を採集し、企画展「秋田の石ころ」に展示しました。この石は、およそ2200万年前に形成された小又川層(旧・阿仁合夾炭層)の黒色泥岩です。中に含まれる植物化石は日本におけるその時代(前期中新世初期)を代表する化石植物群で、「阿仁合型植物群」と名付けられています。

この石から皆さんならどんな硯を作りますか。



アンチポフブナの化石入り木の葉石
(スケールは15cm)



メタセコイアの化石入り木の葉石



木の葉石硯(館蔵)

(地質部門：渡部 均)

秋田の玦状耳飾

縄文時代には漆塗りの櫛や貝輪など、身体のかな部分に着ける装身具が発達しました。これらは身に付けた人を美しく飾ると同時に、社会的な地位を示す役割をもっていたと考えられています。今回紹介する玦状耳飾も、縄文社会を考える上で注目しておきたい装身具の一つです。「玦」という字は古代中国にあった玉器を指し、これに似ていることが名前の由来です。その形は一部に切れ目のついた円環を基本とし、多くは石を加工して作られ、中には骨角や粘土を素材とするものもみられます。縄文時代早期（約9～7千年前）の末頃に出現し、前期（約7～5千年前）には全国的に広がり、中期（約5～4千年前）の前半に姿を消します。大阪府藤井寺市にある国府遺跡の発掘調査で埋葬人骨とともに出土した例を参考として、耳たぶに穴を開けて通し、切れ目を下に装着していたと推測されています。

秋田県内の出土例は、今のところ100点以上確認することができます。材質に注目して見ていきましょう。写真1は前期の提鍋遺跡出土品で、それぞれ石材が異なります。右は透閃石岩製とみられ、北陸の姫川流域や北上山地の早池峰山周辺の蛇紋岩帯に産出する石材です。非常に硬く重量感があり、乳白色で強い光沢を放ちます。中央は滑石岩製で、これも蛇紋岩帯に産出します。比較的軟らかく、独特な深い緑色で鈍い光沢があります。左は凝灰岩製で、軟らかくて加工しやすく、秋田県域でも入手可能な石材と考えられます。これは

透閃石岩・滑石岩と異なり、手触りの滑らかさに欠け、光沢もほとんどありません。

写真2は前期の上ノ山Ⅱ遺跡出土品のうち、製作途中の未製品と呼ばれるものです。右は粗割りと部分的な研磨が、中央は全体の研磨と穴の位置決めが、左は穴と切れ目の製作が途中まで行われています。この遺跡では51点もの玦状耳飾が出土しており、透閃石岩製と滑石岩製も含まれていますが、未製品は全て凝灰岩製です。

写真3は中期の湯ノ沢B遺跡から出土した土製の玦状耳飾です。粘土で作ることにより量産も可能であったはずですが、このような土製玦状耳飾の出土点数は少なく、ごく限られた人物が装着していたと考えられます。

玦状耳飾の素材をみると、県域では希少な石材を用いた製品が北陸や北上山地などの離れた場所から持ち込まれた一方、近場で入手可能な石材や粘土を使って製作も行われていたようです。両者を比べると、形こそ似ているものの、表面の滑らかさや触感、光沢の有無という点で大きな差があります。このような素材の質感の違いについて縄文人はどのように考えていたのか、興味深いところです。

当館では関係機関の協力を得て県内出土の玦状耳飾を取り揃え、令和4年7月31日まで人文展示室に展示しています。御来館の際じっくり御鑑賞いただければ幸いです。

（考古部門：加藤 竜）

【写真1】
提鍋遺跡出土玦状耳飾
（由利本荘市教育委員会蔵）

【写真2】
上ノ山Ⅱ遺跡出土玦状耳飾未製品
（大仙市教育委員会蔵）

【写真3】
湯ノ沢B遺跡出土土製玦状耳飾
（秋田市教育委員会蔵）

※写真中の白線は長さ5cmです。



写真1



写真2



写真3

能代春慶 ～露に濡れる山吹の花～

「秋田名物八森ハタハタ、男鹿で男鹿ブリコ、能代春慶、檜山納豆、大館まげわっぱ」

お馴染み秋田音頭の中で、お国自慢として唄われた能代春慶は、秋田県を代表する工芸品の一つです。岐阜県の飛騨春慶、茨城県の栗野春慶と並び、日本三大春慶の一つに数えられています。

春慶塗とは、染料で着色した木材の素地に漆を摺り込み布などで拭き取る、摺漆工法で仕上げられた塗り物のことをいいます。蒔絵や螺鈿などの装飾は一切施さず、透き通った漆、そして色漆膜を通して見える天然木目の美しさが大きな魅力となっています。

同じ春慶塗でも、産地が違えば材質や製法が異なるため、地域によって独自の趣が表れます。能代春慶の場合は、米代川の上流から調達した良質なヒバの中から、細く揃った柾目の部分だけを使用していました。年輪が水平に流れる柾目は、不規則に模様が現れる個性的な板目に比べてより洗練された印象を与えてくれます。

また、能代春慶は別名「黄春慶」とも呼ばれるように、すっきりと艶のある淡黄色も特徴です。元々黄色味が強いヒバ材にクチナシ、キハダ、雌黄、ウコンなどの黄系染料を塗り、その上から少量の植物油を混ぜた透漆を20回以上刷毛で塗っては布で拭き取ることを繰り返します。更に塗り上がった製品は、その後3年間貯蔵されることで暗赤色から淡黄色へと変化していきます。この時間をかけて生み出される色合いについて、菅江真澄

は「雪の道奥雪の出羽路」の中で「山吹の花が露に濡れているように黄金色に光っている」と表現しました。

さて、当館では江戸時代から昭和40年代までに製作された能代春慶を20点収蔵しています。特に江戸時代から明治期の古能代春慶は10点あり、そのうち4点に鉋目（かんなめ）の装飾のあるものが見られました。残り6点は木地に削りを施さない平らな表面をしています。能代市収蔵の能代春慶も確認しましたが、約900点のうち約400点に鉋目が施されていました。鉋目とは変形鉋を使用して板の表を溝型に削る技法で、規則正しく並ぶ波型模様が特徴です。他地域の春慶塗では、批目（木目の年輪と年輪の間を彫りおこす）や割目（木をなたで割ったそのままの木目を生かす）などが多くみられる中、能代春慶が好んだのは、柾目と同じく直線的に並ぶ縞模様であったようです。

平成22年に技術を保持した職人が亡くなったため、能代春慶は途絶えてしまいました。地元では技術の再興が望まれています。その目途はたっていません。せめて博物館として残された資料の実見、そして他地域の春慶塗との比較から能代春慶の特徴を洗い出し、記録に残すことができればと、日々調査を続けているところです。

（工芸部門：斉藤 洋子）

〈鉋目の装飾がみられる能代春慶〉



「古能代春慶塗 重箱」当館蔵



「古能代春慶塗 杯台」当館蔵



博物館教室



■「キッズ限定 樹皮を編んで小物入れを作ろう」

おうちの人に手伝ってもらいながらオニグルミの樹皮を編んで、ペン立てが完成！
夏休みの宿題もこれでばっちり！！

■「昆虫教室 ー採集と標本づくりー（2回講座）」

小泉潟公園で採集した昆虫の種類を調べ、
標本の作成を行いました。作業に没頭する
参加者たち。

■「糸をつむぐ」

自分で育てた綿を使って糸を紡ぐ講座です。
県立大学から提供いただいた綿の苗を、ま
ずは自宅で育てることに挑戦します。

県立大学の綿畑を見学する参加者。

■「化石と地層の観察会」

男鹿市安田海岸にて、地層の観察と化石の
採集を行い、大地の生い立ちとその調べ方
について学びました。

安田海岸で採集した化石の標本作り



展示・イベント



■コーナー展「ひな人形・押し絵」

3月3日は女の子の成長を祝います。秋田県内
では、土人形や布を貼って作る押し絵のひな人
形を飾りました。

■博物館実務実習

今年は4名の大学生が研修を行いました。展示
室で、資料の梱包方法について学ぶ学生達。

■軒の山吹再現

博物館ボランティア「アイリスの会」による活
動です。菅江真澄が図絵に描いた、金足地区に
伝わる風習である軒の山吹を、分館に再現しま
した。

■教員のための博物館の日

夏休みを利用し、12名の教員が博物館の利用法
について研修を行いました。

■菅江真澄資料センター企画コーナー展

大館・真崎文庫の真澄関連資料について展示
しました。



新型コロナウイルス感染防止の取り組みについて

■新型コロナウイルス対応として、御入館の際にはマスク着用、手指消毒やサーマルカメラによる体温計測等のご協力をお願いしております。

■イベントや教室の最新情報につきましては、当館HPでお知らせいたしますので、事前にご確認ください。

当館のご利用を楽しみにして下さっている方々には、大変ご不便をおかけしますが、今般の事情を鑑み御理解の程宜しくお願い申し上げます。